

二、社會狀勢

エリゼ・ルクリュの生れた一八三〇年前後はヨーロッパ諸國の社會動搖期であつた。ナポレオン戦争の結果、歐洲諸國には保守的反動政治が一時勝利を占めたように見えたが、これに對する急進的煽動運動もまた處と時とに應じて到る處に爆發した。

先づ英國に就いて見るに、ナポレオン戦争の結果、英國の歐洲大陸への輸出額と國家の債務とは激増し、やがて富豪と工業家との權力と金力とを増強し、それに對比して、勞務者の賃銀は減少した。麥の市價は急激に高騰し、大工業の勃興に連れて勞働者群は激増し、賃銀生活者の生活難は言語に絶するものがあつた。一八三〇年頃の英國産業都市に於ける勞働者の困窮はその極に達した。その當時の状態はディケンスの『困窮時代』によく描寫されている。ロバート・オウエンが共働組合を提唱し、各種職業勞働者の結合を圖つたのは、この時分のことである。一八三一年に政治的革命運動に傾いた運動もその翌年には再び純勞働運動となり、一八三六年には彼の提

唱の下に全國勞働者の大組合が組織せられ、その組合員はやがて五十萬という多數に上つた。その目的は、議會をして八時間勞働制を議決せしめるために總同盟罷工を斷行するにあつたと言われる。

保守的反動の中心は寧ろ歐洲大陸の東部にあり、オーストリアの宰相メッテルニヒや、ロシアの皇帝アレクサンドル一世がその主腦であつた。従つて大陸諸國の保守的政策が嚴酷であつた爲めに、これに對する反抗運動、自由主義革命運動もまた激烈であつた。イタリアに起つた炭焼黨の運動はフランスにもスペインにも波及し、次でマデニの『青年イタリー』の革命運動はヨーロッパ諸國に波及して各國の青年黨が成立するに至つた。それは民主的共和制の樹立を目的とする革命黨で、『青年ポーランド』『青年ドイツ』『青年フランス』『青年スイス』『青年スペイン』等の團體が組織されたのである。ドイツにヘーゲル學徒の急進的運動が起つたのもこの當時であり、イギリスにチャーチストの運動が起つたのも、殆どこれ等に次いだのであつた。

ナポレオンの失脚後、列國干涉の下に成立したフランスの新王朝は保守的專制政治を行つて來たが、その内閣はしばしば更迭して動搖は常に絶えず、自由主義の氣勢は日を追うて高まるばかりであつた。エリゼの生れた一八三〇年には、專制派と自由派との紛争はその頂點に達し、政府

は議會を解散し、選舉法を改め、出版の自由を禁じ、パリ市民はこれが爲に非常に激昂し、學生や勞働者は悉く奮い起ち、遂にパリ全市を占領してオルアン公ルイ・フィリップを皇位にすえ、ここに自由主義者は勝利を得て、信教、出版の自由、王權の制限を規定した。これが即ち七月革命と稱せられるものである。しかしながら、多年闘争の結果として政治的自由を獲得したものは獨りブルジョアであつて、一般の勤勞階級は政權の圈外に遺棄せられ、貧困階級として新たに革命的社會運動の主要素たるべき兆候を現わして來た。その運動の兆候が最初に現われたのは、即ち一八三一年、リオン市に於て『勞働に生きよ、しからずんば戰鬪に死せよ』と書いた黒色旗を押し立てて武裝蜂起した餓えたる勞働者の革命運動である。勞働者等は市街戰の後、十日間同市を占領し支配した。共和主義者は彼等を集めてミューチュアリストと稱する一種の共濟結社を組織したが、一八三四年に機織工の同盟罷業があつた時、この結社は政府の禁止するところとなつた。この時再びリオンに一揆が勃發し、その戰鬪が四日間続いた。

この時に當り、人權の宣言に關して共和黨は二派に分裂した。一は所有權を以て法律に依て定められた特權となし、すべて法律によつて改訂し得るものと見做した。この派を代表したのはカヴェニヤック等であつた。しかるに例のコンバンション（大革命の時の立法協議會）の主旨を確

守するアルマン・カレル等の一派は所有權を以て自然の權能と見做すのであつた。ここに於て、單に政治的革命のみならず、社會的革命を希望する青年等は共和黨から分離して社會的政黨を組織し、諸方の秘密結社を指導して陰謀を企てた。そして常に三色旗を用いてきた共和黨の傳統を打ち破つて始めて赤色旗を用いることになつた。一八三二年の彼等の宣言は『政治的變革よりは寧ろ社會改造を欲する』ことを明かにした。この一派は一八三九年に至りて自ら『共產黨』の名さえ採用するに至つた。

當時のヨーロッパの社會狀勢は以上の如く、新しい社會思想と社會運動との勃興を促がすべく波立つていた。否な既にサン・シモンやシャルル・フーリエやロバート・オウエンの如き社會思想家が各國各地に輩出していた。こうした社會狀勢の中にあつて最も敏感にこれに動かされたものは恐らくキリスト教徒であつた。サン・シモン學徒の新キリスト教の提唱の如き、アベ・ド・ラムネイの『一信徒の言葉』の如き、いずれも當時のキリスト教徒のみならず、一般社會を刺戟したことは多大であつた。サン・シモンが死んだ時、その門に集まつたものに多くの名士があつたことを見ても、それが了解されるであらう。今その人々の名を見るに、ロドリグ（直弟子）、アンファンタン、バザール、アドルフ・ブランキ、アルマン・カレル、オーギュスト・コント、

ローラン(アルデーシの)、ビュシェー(一八四八年の民選議院議長になつた人)、カルノー(假政府の文相になつた人)の如きいずれも錚々たる人物である。そして、いずれも當時の社會に大きな影響を與えたのである。ラムネーに至つては、最も熱烈なキリスト教徒にして痛烈にカトリック教徒の貧者階級に對する無關心を非難した。エリゼ・ルクリュの生れた一八三〇年に彼は『未來』(L'Avenir)と云う新聞を發刊して『神と自由、法王と人民』等の題目を論じたが、その翌年にはローマに行つて法王に直接面會を求めたが許されず、一八三二年の法王の一廻狀は暗に彼の『未來』を非難し、彼を教會から追放した。ここに於て彼は一時沈黙を守つた後、例の焰ゆるような『一信徒の言葉』を著わして一世を震盪せしめた。彼はこの書中に「基督教は愛と奉仕なり、フランスのカトリックは之に反す」と放言している。一八三九年には彼はその一小著書のために禁錮十二ヶ月の處刑を受けた。

アメリカに多くの移民を送つたフランスはアメリカの獨立戰爭にも多くの援助を與えた。そのアメリカに信教の自由を享樂する爲に故國イギリスから渡航して來たクエーカー教徒は、この新大陸に於ける黒奴保有に深甚の反感を懷いてゐた。このクエーカー教徒とともに奴隸解放の宣傳を開始したウキリアム・ロイド・ガリソンが、一八三一年一月一日に發行した『解放者』の標語は『吾

等の國家は世界なり、吾等の國人は人類なり』であつた。(この時はクエーカー教徒と別れてサック・ナップという勇敢な同志と結び、唯一人の黒人少年を助手にした)ガリソンに對する脅迫狀は毎日彼のところに舞い込んだ。ジョージヤ洲政府は懸賞を掲げて「彼を捕え、告發し、裁判に附するものがあれば五千弗を與える」とまで告示するに至つた。しかしこれと同時に味方も急激に増加し、彼の主張を援助するために『新英州奴隸反對協會』という一團體が組織された(一八三二年一月)彼はクエーカーの感化を受けた無抵抗主義者であり、基督教無政府主義者と稱せられるが、彼の感化を受けたものにロシアのトルストイがある。しかしこうした運動は米國殖民地と最も親しい關係にあつたフランスに傳えられたことは言うまでもない。エリゼの父ルクリュ牧師が、こうしたニュースに接して血を沸したであろうことは想像に餘りある。

更らにドイツのモラヴィアン同胞教會の主義と活動とは當時のキリスト教界に深甚な刺激を與えた。モラヴィアン教會はインタナショナルの精神と人類同胞主義とを以て教義としたもので、一種の人道的社会主義と見ることもできるのである。牧師ルクリュがその子達を此處に送つて教育と陶冶とをこれに委ねたのも、またその態度に感激した爲めであつた。エリゼ等が此處に送られた時は、この教師達の中には思わしからざる人物もあつたらしいが、とも角も、牧師ルクリ

ユが非常な信頼をこの團體に寄せたものであることは疑うの餘地がないのである。

エリゼは實にこのような時代に生れたのである。彼が漸やく成人して、社會の諸現象に注意するようになつてからのことは次の『社會思想』の章に於て別に略序したいと思う。ただここに一語を加えて置く、それは一八三二年以來、『社會主義』という名稱が右の社會的政黨運動に適用せられるに至つたこと、これである。